

結局猪山は一度も帰省せず、あれから又別のバイトをしていたらしい。今度の見つけてきた新しいバイトは、1日3千円という凄いやつだった。但し夜の8時から次の朝の5時までという、大変ハードなものだった。僕は、一週間だけ行こうか、と云う事になった。仕事は製本だった。PM10時から15分、午前0時から45分、AM3時から15分の休みがあるにはあったが、覚悟していた以上にきつかった。次から次へと流れてくる本の製本をしたり、目一杯荷車に本を積んで別の場所に移動するのが主な作業だったが、昼と夜が逆と云うのは、これほど人間の体にこたえるものかとおつくづく実感した。僕は、自分の肉体を極限近くにまで痛めつける事で、明美の事を忘れようとしていた。これ位の罰では軽すぎるだろうが、少しは罪滅ぼしになるかも知れないと、自己弁護をした。

9月になると、故郷から帰ってきた学生達で、キャンパスにも再び活気が戻ってきた。久しぶりに、吉田、熊沢、猪山と僕の豪華メンバーが揃い、近くの雀荘で卓を囲んだ。

「お前達、今度のナイトラリーに出場しねえか？」

と、リーチをかけながら熊沢が皆を誘った。熊沢の話によると、秋の文化祭の行事の一つに、夜の8時に大学を出発し、50キロを歩いて走ってもいいから、とにかく走破し、又大学に戻ってくる、と云う催しがあるらしい。猪山は金にならないから嫌だと言い、吉田はかったるいから嫌だと言うので、僕が付き合うことにした。その日は9月28日だそうで、まだ3週間近くある。少し足腰を鍛え、トレーニングでも積もうか、などと熊沢と話したが、結局何もせず当日を迎える事になった。吉田と猪山がスタートの地点に来て、[せいぜい頑張れよな][心の中で応援してまっせ]などと、冷やかして帰って行った。周りを見渡すと、5百人位いたろうか、女子学生もかなり混ざっていた。食べ物や飲み物を、入れたリュックを背負った者も多くいた。熊沢が不安そうに、

「おい、伊達。俺達も何か食べ物かジュースでも、持ってきた方がよかったんじゃないのか？」と心配そうに言うので、

「大丈夫だよ。中間点の東中野の休憩所へ、彼女が、おにぎりとお茶を持って来るようになってんだから。安心しろよ。」

「本当に持ってくるんだらうな。彼女、小金井だらう、知ってんだらうな、ちゃんとした場所。」

「この間会った時、地図、ちゃんと渡しておいたから、間違いはないよ。」

豪砲一発、勢いよくスタートした。中間点までは、小走り状態で到着した。百合が僕達を見付けて、

「伊達さん、ここよ。」

と言って手を振りながらやって来た。

「すごいわね。今なら完全に百番以内よ。大丈夫？疲れてない？」

「うん、ちょっと疲れたけど、思っていた程じゃないよ。ああ、こいつ熊沢。こちら柿沼百合さん。」

簡単に紹介をし、百合が作ったであろう、おにぎりを熱いお茶で流し込みながら食べた。卵焼きとか、ウィンナとか、ほうれん草など全部たいらげ、15分程で再び出発した。

「気をつけてね、余り無理しないで。これジュース水筒に入れておいたから、また飲んでね。それじゃ、頑張てね。」

「うん、ありがとう、じゃあまた。」

百合に見送られながら、勢い良く再スタートした。

「おい、話には聞いていたが、彼女美人だなあ。うらやましいなあ。もうやっちゃったのか？」

「バカ、まだ、手もつないでないよ。」

「本当かよお。」

(よくよく考えてみると、そうだなあ。最初のデートの時、軽く腕を組んだだけで、何にもないなあ)

再スタートして5～6キロ走っただろうか、最初のガクンがやってきた。

「おい、ダメだ、腹が痛い、休もう。」

と僕が根をあげた。

「しょうがねえなあ、全く。」

熊沢がぼやいた。僕は舗道の縁石に腰を降ろした。それが決定的に悪かった。2～3キロ行っては休み、2～3キロ行っては休みの、連続になった。前半に追い越していった女の子達に、[お先に]と今度はドンドン抜かれていく。落後者を拾っていく自動車が、おふくろのように思えてきた。午前2時。残り10キロ。

「おい、どうしよう？あれに乗るか？」

情けない声で熊沢が言う。

「それもしゃくだなあ。ペース配分を考えりゃよかったなあ。」

「今更そんな事言ってもしょうがないよ。ジュースもないし、どうする？」

「もうちょっと行ってみようか？」

～2キロ行っては休み、1～2キロ行っては休み、になった。それでもようやく、後3キロの標識が見えた。突然、熊沢が、

「おい、伊達！俺の顔を殴れ！」

と言い出した。気が狂ったのかと思ったがそうでもないらしい。

「おい、本気だ。俺の頬を殴れ。早く！」

と叫んだ。僕は立ち上がり、思い切り熊沢の頬に平手打ちをくらわした。熊沢は、今度はお前の番だ、と言って、僕に平手打ちを、それも2発くらわした。僕達は自然に肩を組み合い、2人3脚のように、いち、に、いち、に、いち、に、と声を掛け合いながら進んだ。夜がしらじらと明け始めてきた。それでもいちに、いちに、いちに。午前5時過ぎ、二人はゴールに倒れ込み、そのまま大の字になった。

「おつかれさま、これ、完走バッチです。」

と言って、係の女の子が、小さなバッチと紙コップに入ったコーヒーを手渡してくれた。無言のままコーヒーをゆっくりすすった。ちらっと熊沢の横顔を窺うと、朝の陽光に、キラッと光るものがった。僕も一すじ涙が頬から顎を伝って、アスファルトへ落ちた。(ありがとう、熊沢。お前は本当にいいやつだ。お前に巡り合っただけでも、大学に来た甲斐があったよ)僕は心の中で叫んだ。足を引きずりながら、僕は椎名町のアパートへ、熊沢は桜台のアパートへ帰った。それから、2～3日はまともに歩く事が出来なかった。それもそのはずである。足の裏には、直径3センチくらいの豆が3つか4つ、出来ており、爪も2～3枚割れていて風呂にも入る事が出来なかった。